

秋水
泡語

卷
の
二

一
九
九
八
年

わたしたちが若干の秩序を要求するのは、カオスから自分を守るためではない。それ自身から逃れる或る思考、逃げていく或るいくつかの観念——荒仕上げすらほとんどされていず、すでに忘却によって蝕まれているか、あるいはわたしたちがもはや制御していない別の諸観念のなかに投げこまれるかして、消えてゆく或るいくつかの観念——それらこそ、無色か沈黙の無の不動性と交じりあっている無限速度たちである。…

わたしたちが要求しているのは、自分が手にしている諸観念は最小限の恒常的な諸規則に従って連鎖しているということだけである。…それらの諸規則のおかげでこそ、わたしたちは、諸観念のなかに若干の秩序をもたらすことができ、空間と時間の秩序に従って一方の観念から他方の観念に移行することができ、…

ジル・ドウルーズ、フェリックス・ガタリ

わたしは、カオスの上に平面を描くことも、有限なものを創造することもおぼつかないが、感覚していることは確かなようだから、ときどきは、泡のような言葉が口について出るのである。

一月二日
三日月の初夢銀のしづく垂る

一月八日
新年を祝い立つ木に幾宝珠

一月十三日
朝日射すぬれたサザンカ励起せよ

一月十五日
定年を目の前にして命下り逝く人のあり耳に歌声

人会えばコミュニケーション通夜の席

一月十七日
アドバールン動かず震災三周忌

一都市が午睡している冬の風

目を閉じていたら遠くで山茶花の落ちた微動が聞こえたような

一月二十四日
雪かぶり頂にありバラ赤く

雪の中メタセコイアは天を衝く

風船に吹雪樺の救いの手

妻、母と「女人四十」の映画見て映画ほどには心なごまず

雪山を見て母は言う「山は雪」

一月二十六日

下戸の酒醒めて虚無見る寒の夜

一月三十日

凡人の力費やす些事あつて為すべきほどに為して暮れる日

二月一日

『人間の死にかた』という本呼んで人それぞれの生きかた思う

こめかみの脈枕打つ寒の夜

二月五日

夕刊「素粒子」に、三好達治の一節が引用してあった。

「私の詩は／三日の間もてばいい／昨日と今日と明日と／
ただその片見であればよい」

「讃」

私の泡語は

今日生まれるか

形見となるほど

典雅であるか

二月七日

暴走の音去って聞く冬の風

二月十一日

霜撫でて朝日は土に春告げる

二月十二日

春が来た日のたそがれに

コウモリの初踊

あやういリズム

タンタン　ルルル

二月十三日

朝霧にぬれる石段のぼる僧

海霧が寄せて山々薄衣

海霧に漂う満珠春の島

二月十四日

健忘の母とはげしく言い争う人は無明の脳を持つ物

わたし自身が、海馬という言葉を思い出せなくて、辞典を引く身である。

二月二十五日

菜の花や向き定まらぬ風車

二月二十七日

扶桑まで長安の使者黄砂来る

黄塵に少年のスクラム対峙する

三月一日

菜の花と歩む法被は諸規則下

巡礼の歩む渚に寄せる春

冬越した雀が都市を見晴るかす屋根で未来の構想語る

三月三日
早春の太古の空に三日月

歓喜せよ木蓮の花生成し我並び立つ只人として

「過ぎ去る世界の一分間が存在するとき、ひとはその一分間を、その一分間に生成することなしに保存することはないだろう」…セザンヌ

「合成＝創作、コンポジション、それこそ芸術の唯一の定義である。」

…ドゥルーズ、ガタリ

三月九日
[The Tables turned]

よろしい、書をおくがよい

しかし、もう片方の算盤もおくことだ

ご破算に願いましてはの世になったのだから。

よろしい、自然に帰りたまえ

久しいあいだ本当の自然であったことはないのだから
どうすればよいかって？ それは自分で考えることだ。

さしずめ木を実生から育てたらどうか

生命とはそうしたものだから

森をどう航海すればよいか考えるのだ。

永い沈潜が必要だ、覚悟したまえ

木々が育ったら、一本の木から彫り出すのだ

カルキュレイトするものではない思考船を。

手のひらにのるその思考船は

おまえを乗せるほど大きい器でなければならぬ

また、おまえはそれに乗れるほど柔軟な身心であれ。

その船で世界を測量しながら

航海に乗り出せ
世界へ。

三月十二日

墨衣小走りに行く菜種梅雨

木蓮が黙して受ける細い雨

長田弘著『記憶のつくり方』に、幼い日に見た祖父の亡骸が炎の中に燃え上がる光景が、美しい文字の落ち着いたじつとみつめる力を感じさせる文で記されている。目を上げると窓ガラスに少し不鮮明に写った自分の顔が見えた。いつか、こうして見ている自分とガラスに写る姿が存在しなくなる時が来るのだ。窓の向こうに町の光が広がって、そのさらに向こうに暗い海が横たわっている。

春の波寄せる、月見て閉じた目に

(如月十四日)

三月十四日

母なじり散歩、レンギョウ咲く丘へ

(母を連れて)

おぼろ月うき世に運ぶこの好事

三月二十日

わが山に思いがけずに春の雪ひとを養う天地の夢想

三月二十二日

彼岸西風納骨堂の上に風

三月二十六日

二十三日から西安に來ている。白居易の詩「東城尋春」を人々に示す。

麦植えた秦地春塵はてしなし

法門に入るに無無門春の風

法門寺本堂入口左柱の銘は、「門無門無無門入無無門」。

大塔の風鐸鳴らす佛の指

乾陵に青き麦畑接しあり

則天武后の方の墓誌は元無銘であつたということ。

人の生みな素面にて春に会う

三月二十七日

大雁塔西への道は春霞

希求するものへかすみの彼方まで

三月三十日

世話になった人に詩のまねごとの漢字を連ねたメモを渡し謝す。

華山重巨巖

峰上晴天春

不見神仙形

唯知松風薰

四月四日

夜桜の此岸を歩む酔い醒めて

四月六日

無責任無能の中で身過ぎの身はなのひとひら淡く装う

四月七日

蝙蝠が盲いて花を散らす闇

闇の海花流す果て桃花源

四月八日

山吹から滴が落ちて新しく光が満たす大地生まれる
たそがれに花の雪敷く花祭り緑萌え出て無声の讃歌

四月十日

田舎へ列車で日帰り。

はらはらと続く散花に時止まる

散華する時空に蝶の生まれけり

風渡る身の内外の蓮華畑

地藏尊春の木陰で赤頭巾

吊るし柿桃の花見る里暮らし

春うらら烏の肩に届く草

陽の道は沖つ島まで一筋に長門二見に春の日暮れる

四月十七日

春雨の中を行く風光りけり

四月十八日

目をこらす森の喧燥青葉涌く

四月十九日

籠もり堂藤も葛も若葉なり

田園のいのち燃え出る中に立つ条不条理は渾然とあり

しなやかな若葉のちから身から失せ渴きおぼえる春の盛りに

四月二十三日

鯔飛んで立つ波寄せる春の磯

漁り火がふちどる海に絹の雨

四月二十四日

イルカ跳ぶ海と都市との春の下水と空とを見る眼持ち

四月二十九日

竹の子は背伸びし藤の花房へ

五月三日

二人の母を連れて白糸の瀧へ。今日は少し見通しがわるく、玄界灘までの眺望を楽しめない。まだ山藤の花が残っていて、桧林の梢に優雅な姿を見せている。瀧の前の大きな楓の下に緑に満たされた空間が静かな場をつくっている。そのうち海から霧が流れてきて、すーっと梢の藤も霧に没した。瀧の流れの音だけが響く。

瀧音に楓の緑降りしきる

霧深く籠める五月や瀧を聴く

玄界の霧卯の花となつて散る

〔ダンテの〕三行から成る連は、水晶のように内部から形成されるのであって、石の

五月四日

ように外部から削られるのではない。」…S・ヒーニー
秩父の山里の花祭りの様子をテレビで見た。つつじなどの花を集めて子供たちが泊まり込みで「花御堂」はなみどうというのをづくり、花を降らせながら里の道を通っていく。

釈迦おわす花の御堂を守る里

釈迦通る後に花敷く道一つ

散華する野の道を行く稚児の列

五月十三日

「反時代」

わたしの泡語は
明日生まれるか
微笑を生んで
闇を開くか、

五月十五日

道見えぬ雨の海原進む船航跡もまたすでに波間に

五月二十二日

藤棚に五月の風がたわむれて葉群の下に光る玉散る

五月二十六日

掌に螢入れて見上げる北斗星

五月三十一日

卵落ち今は主なき鳥の巢は入念な作櫟捧げ持つ

はやサツキ刈って明日期す五月尽

六月一日

紫陽花の変化に燕低く飛ぶ

「鬼界ヶ島」

シテ「フサハシカラヌ者ヨリ、地位ト名誉ヲ、フサハシキ者へ返へセ」

ワキ「果タシテフサハシキ者ノ世ニ在リウベキ」

シテ「サレバ、権力ト虚栄ヲ地上カラ滅スベシ」

ワキ「イズレノ人カ、ソレヲ欲セザル」

鬼「ムベ、人モロ共ニ葬ムリサレ」

「希望」

果たして君は

願いうるか

君の敵さえ

救われること、

果たしてわたしは

信じうるか

このわたくしが

救いに値すると。

六月四日

芍薬は一つの世界を創り立つ
君もまた立てこの時と場に

六月七日

天神の池で千年甲羅干し

飛び梅の下で日傘をたたむ人

峠から瑞穂の国の水田見る

六月十日

地を滑るツバメわたしへまっしぐら

六月十三日

さみだれが泥から作るラガー達

水の田に天から無数の水の糸

六月十八日

眠たげな海馬は海馬を記述した言葉の海を迷いつつ行く

六月十九日

思いがけずに 小さな花が

わたしの花瓶に 静かに開く

世に在るものの あるべき姿

濃い紫の 五蘊ひととき

六月二十四日

クチナシを挿して根づきの時を待つ

六月二十七日

この生の暗闇深く不可思議に御されて進む光に会うか

六月二十八日

三十三曲がる峠を越す蝶の瞳は深い緑に染まる

七月五日

まぶしさや合歓の西施を焼く陽射し

七月六日

「梅雨明け」と蚯蚓の乾く後に告げ

七月十日

クマゼミが歌う季節の中に在れ

火花飛ぶ凡凡たる夏鉄工所

七月十五日

わさび田に回帰する水果でしなし

硬直の始まるむくろある部屋のエアコン寒し真夏の夕べ

七月十七日

夏陽射しこがれまた生きる藤の花

七月十八日

向日葵と網戸の内の黒い猫

七月十九日

ひとしきり世に咲いてある遠花火

七月二十日

今日幾度母の繰り言蟬の声

暮れて鳴く蟬は老母の嘆き鳴く

七月二十九日

油蟬鳴いてじりじり行く歴史

七月三十日

変動の局面人無くて夏の坂

七月三十一日

夕顔に流し目をしてペダルこぐ

八月一日

引導を渡す儀式に年経つつ在る身を思う答えを持たず

八月二日

戻り梅雨ようやく明けて八月の査いかだこぎ出せあの大河まで

汗かいて夏の入り日に蝶踊る

八月七日

水草が花ちりばめて凌ぐ夏

八月二十日

炎天がけむり朝顔青を濃く

一房の藤の短い夏期休暇

八月二十一日

「人の心のメカニズム」

石段に

鉄の手すりをつけました。

白いペンキを塗ったのは

あの仕事師の棟梁さん。

使い初めをした母が

ぴょんぴょん跳ねて下りて行き

ころんで向うずねを打ちました。

老母にふって涌いたのは

いったいどんな心持ち？

八月二十七日

閉じる眼にただ虫の音と化す宇宙

八月二十八日

一年の雨が二日で降る夏におろおろ歩くなお明日を期し

八月三十日

夏陽射し避けて魚影も木蔭下

黙し聞く黙す宇宙の謎の意志

九月五日

新来の花木の秋や鉢二つ

紫の小さな花に秋は今とき

九月七日

満月を背にふくろうは物語る

虫と鳴く人の声満つ天地かな

秋風と価値の彼岸へ渡り行く月の光の波に身を置く

十月三日

千秋の堀に蓮咲く残暑かな

(千秋城)

御番所で千秋の行きし跡を見る

十月五日

黒堀の奥に咲く萩古武士立つ

(角館)

「日本の短歌の抒情性というのは結局共同体の中にあることの安心感のようなものじゃないか」、「そもそも詠嘆というのはそういうものじゃない?」

……………岡本厚と藤田省三が対談でそう言っている。

十月十八日

神官のマスクは人を疎外して青銅のごと動かずにあり

美術館出づればすでに名工は銀杏黄色く描きつつあり
凡人は置き去りにされ天動く

十月二十日

奥山に草紅葉ありこの世界

十月二十一日

雪虫のたより聞くころ同窓が倒れたという e-mail 来る

息一つ金木犀で心満^{むね}たす

十月三十一日

暮れる秋あてなく空を昇る蝶

十一月一日

頑強に我をはったことさえ忘れ去り今という時母に始まる

十一月二日

逝く友や花となり泣く不如帰

今日はホトトギスの花を小石原焼きの瓶に生けたところであつた。
大学一年のときいっしょに旅行したことなど思い出す。

十一月三日

死に顔を見る枕辺に桔梗一輪

わたしの発した言葉はこの一挿しの花に及ばない。

秋の月何度も仰ぐ通夜の帰途

十一月十一日

秋ふけてガリレオ温度計の玉上がる

十一月十二日

友遠方より来たる。訪れる人も少ない晩秋の能古島を散策。

遅咲きのコスモス捧げ島の海

花畑に花無く石路の花と海

秋の蝶海へいざなう島の丘

十一月十四日

清流へ毛虫が歩む小春の日

十一月十八日 ものすべて時熟の時や時雨ふる

十一月二十一日 銀杏散る黄の残像の虚空成し

十一月二十四日 霜降りる宇宙に浮かぶ星の上

十一月二十八日 追憶し桜紅葉の散り残る

十二月一日 揺れ動く浮世をよそに山辺の里に静かに降る小春の陽

十二月四日 満月の下で蜜柑を買う留守居

十二月七日 どの道か八十路に迷う歳の暮れ、 人生の冬、誕生日忘れて祝う母

ひつじ田が実る便りに励まされ

十二月八日 流転して宇宙に浮かび仕事する人うみだした大千世界

重力によって空気を保持する船の上でうごめく人間すべてが、宇宙飛行士と変わるところはない。

ところで、昔この船上で今日戦争を始めたということを言う人もいない。

十二月十三日 寒鯉のあらい氷と磁器の上

十二月十四日 木枯らしの闇抱え立つ大銀杏

十二月二十三日 赤肉は柚子と浮かべば無心なり

十二月三十一日 鏡餅心はずませ搗くうさぎ

一九九九年 正月

徐山亭 謹製



加藤周一戯曲草稿『富永仲基』の一節

「学問は言葉だよ。生きることは、言葉ではなくて、いや、考えることだけではなくて、感じることだ。眼で楽しみ、舌で味わい、指先で触れ、耳に聴き……お前が弾く琴の音は、はるか遠いところから、言葉ではいえない何かをはこんで来る、幼い頃の夕やけの空、盛り場の祭りのざわめき、春先のしめった風の肌ざわり、今ここにはないすべてのもの、過ぎ去ったやさしさや悲しみ、明日への望みや恐れ……おれはお前の琴の音のなかにお前を聴くのだ、お前の心の波立ちを、お前の命の樹の緑を。」

『三題噺』

(加藤)すべての形而上学は抒情詩である。

(仲基)人生は定義することのできない言葉から成り

立っているようだ。

(加藤)そして言葉にあらわせない感情からも。